

記憶に残る私の仕事,そしてあの街

品質に対する日本とアメリカの違い



加納 英範

戸建住宅は大手ゼネコンの多くが一度は手掛けた分野ではあるが、何れも撤退している。今から17年前の事である、唯一PCコンクリート住宅で生き残ってはいたが、市場が小さかった為、さらなる受注拡大を目指して木質系の住宅で新たな工法を模索することになった。

今日の住宅では当たり前の性能となっている断熱と気密性を十分に確保した上で工業化されたシステムを目指し、10人のプロジェクトが組まれた。私もプロジェクトの一員として参加することになり、担当する分野は、品質・耐久性・防耐火であった。

社内には、コンクリートのプロは多く在籍するも、木質系に通じる者は見当たらない状況だった。現業から初めて開発部門に配属されたばかりの私は戸惑うばかりで、ましてや、木質の防耐火となると、どこから取り掛かったら良いか見当もつかない状態だった。

そんな中、構造は、北米で既に歴史のある木質複合断熱パネルを用いた枠組壁工法に決定された。国内でも既に同様のパネルは造られてはいたものの「全ての点で技術の最先端を目指した住宅を自社製のパネルで造れ」との命で、本場であるアメリカで製造過程と品質管理の方法を修得する為、急遽渡米する事となり、シアトル近郊の工場に出向いた。断熱材は購入品ではあったが、合板と断熱材の接着プレス・パネルの加工・接着強度の測定等、基準がきめ細かく定められていた。

計測用の道具を持参していたので、相手先の技術者と寸法のチェックから始めた。私は、ノギス・差し金を取り出し計測を始めたところ基準値より大きく異なる。技術者に問うと不良品だと撥ねた。しかし、それ以降も大部分が基準値を超える物であった・・・技術者はいつしか居なくなっていた。

後の打合せで、その旨を伝えると、「パネルを現場では人力で組んでおり、数mmの誤差は、住宅の性能には関係ない。基準値は、日本人の繊細な性格に合わせたマニュアル」との事。さすが、差し金を取り出した時はびっくりしたと笑い話となった。

日本人は、全ての品質において良質で完璧を要求する。これは、ランバー材の規格においても同様な事が言える。顧客の求める性能品質は国により多に異なる。良い物を造れば売れるとした考えが、近年の工業製品（電化・自動車等）でも苦戦の原因となっているのではないかと。

断熱パネルによる新たな商品も苦戦を強いられている。

